

2. 沿革・配置分合

A 沿革

矢板市付近は、古くは「しほのや」と呼ばれ、奈良時代から平安時代初期にかけての大和文化と山岳仏教の北限の地であったろうと思われる。

また、市内各所の高台からは先史時代の遺跡・埋没品が数多く出土するほか、古墳群や集落跡の分布も極めて多く、かなり古い時代からこの地方には人間が居住し、「むら」が存在した。

平安時代の後期になると、現市街地南方の木幡、川崎反町、中地区を中心として「塩谷氏」が興り、秀吉による改易までの約400年にわたり、塩谷荘33郷を制した。

この後、塩谷氏の遺領の一部は「岡本氏」が継承し江戸時代を迎えるが、50年程で改易、矢板地方33カ村は佐倉藩など3藩の領地と20余の旗本知行所に細分化され、この分割統治が明治まで続く。

この間、現市街地を横断して開設された「日光北街道」の間屋、宿場を中心に物資集積の地として発展の基礎を築いた。

明治4年、廃藩置県によってこの地方は日光県、宇都宮県などに3分されるが、同6年、栃木県の所管となり、同22年市町村制実施により「矢板村」、「泉村」、「片岡村」を設置、同28年、矢板村は町制を施行し「矢板町」となった。

また、同17年に国道4号が、同19年には東北本線が相次いで開通し、矢板、片岡両駅が開設されて、この地は県北交通の要地となった。

昭和29年12月31日、矢板町は田野崎村大字沢、成田、豊田を編入、翌30年1月1日、矢板町、泉村、片岡村は合併して矢板町を設置、同年4月1日、旧片岡村大字松島を氏家町に分合して、昭和33年11月1日、矢板町は市制を施し「矢板市」となり、現在に至っている。

B 配置分合図

